

ヴォワチュールの詩の猥雑さとパロディ

田 島 俊 郎

La grivoiserie et la parodie de la poésie de Voiture

Toshiro TAJIMA

Résumé

Dans notre étude précédente, nous avons constaté que les figures des femmes décrites par Voiture étaient figées et abstraites. En suivant l'esthétique traditionnelle, le poète décrit la beauté des femmes en empruntant des mythologies et le discours pétrarquiste. Mais nous ne voyons pas les images concrètes des femmes mais que les notions abstraites de la beauté féminine. Dans la plupart de ses poésies, le poète raconte la cruauté de la femme aimée, et les femmes sont traitées avec respect. Mais il y a aussi des poésies dans lesquelles Voiture s'adresse aux dames avec hardiesse et grivoiserie.

Dans ces poésies grivoises et comiques, Voiture a parodié non seulement les figures traditionnelles des dames mais aussi le style traditionnel de la poésie amoureuse. Si nous sentons quelque charme pour ces poésies, cela ne réside pas dans l'attitude du poète auprès des femmes mais dans la parodie du style noble et figé.

Nous savons que la première moitié du XVII^e siècle était l'époque où le raffinement de la langue était une obsession des salons. Comme le premier poète de l'Hôtel de Rambouillet, Voiture ne peut pas être hors de ce courant. Et nous savons aussi que Molière se moquera de la langue précieuse. Voiture serait une cible de Molière comme poète précieux, mais ne pourrions-nous pas observer, dans les poésies burlesques de Voiture, l'esprit critique sain de Molière?

はじめに

われわれは先に、ヴォワチュールの詩の中で描かれる女性の姿が定型的で抽象的であること、ギリシア神話や花の名前などを援用するにも拘わらず、そのイメージは決して豊かとは言えないことを見た¹⁾。ヴォワチュールは多くの詩の中で、男性が想いを寄せても近寄りがたい存在として女性を表現する。しかしヴォワチュールの作品の中には、文学における伝統的な女性像とは異なり、きまじめに愛を語るのではなく、女性を滑稽にあしらう作品がある。本論ではこれらの作品を読み、この女性像の変化を、17世紀前半の文芸の流れに位置づけることを試みる。

近寄りがたい女性像

われわれは先にヴォワチュールの作品の中のテーマとして神話世界と女性美への賛嘆があふれているのを見た。確かに女性美は繰り返し語られ、賞賛されるのだが、女性の姿は抽象的な美として描かれ、具体性に乏しい。拙論から引用する。

「ヴォワチュールが語る女性の美はまれに大胆な例を除けば、概して観念的でおとなしい。表現は抽象的で、具体的な女性の姿はほとんど語られない。女性の「魅力」や「優美さ」、「美しさ」は倦きず語られるのに、実際にどの部分の美しさが語られるかという、せいぜい美しさを歌われるのは「目」だけで、「百合のような肌合い」にも「薔薇のような口」にもまれにしか出会うことはない。」²⁾

また女性の内面は語られない。恋愛詩といいながら、逆説的なことに、女性はいくまで見られ、敬される存在なのであって、対象となる女性と詩人の間には精神的な交流はない。

「女性の精神性の美しさは語っても仕方がないのか、「魂」や「心」は主に詩人の側にのみあるようだ。ましてや「理性」となると女性には全く付与されない。」³⁾

Henri Lafay はヴォワチュールの『詩歌集』の序文でヴォワチュールの語彙

1) 田島 (1995)

2) 田島 (1995) p.165.

3) *loc. cit.*

は女性の美をたたえると同時にその女性の残酷さを述べる慣用的な表現に充ちていることを示す。⁴⁾

Alain Génétiot によれば、愛のディスクールは月並みな表現を多用する。これがジャンルとしての一体性を作っている条件でもある。13世紀以来の伝統、ペトラルカの影響、ルネサンス期のネオプラトニズムの影響はアストレを介して17世紀前半には継続していた。1620年代には Marino や他のイタリアの作家たちの影響が見られる⁵⁾。伝統に則って描かれる男と女の関係は、満たされない愛の残酷さであり、愛される女の冷たさ、残酷さである。

代表的な作品であるソネ「ユラニー」(op.18.)⁶⁾に見えるように、ヴォワチュールもまた、愛を受け入れず、想いを寄せる男を殉教者にしてしまう残酷な暴君として女性を表現する。

「余の命はユラニーへの愛の内に終えられねばならぬ。不在も時も余を癒すことかなわじ。もはや余を救い、余の自由を取り戻しうるもの見えず。(1-4)

いにしえよりかの方のかぎりなき厳しさを知れども、身を滅ぼすに値する美しさを思えば、余は余の殉教を称え、死すを喜び、かの方の専制に恨みは述べえず。(5-8)

時に余の理性、その弱き弁論をして余を反抗に誘い、余が救済を約す。されど余がかの方に仕えんことを望む時、多大なる苦しみと、無益な労苦の後、理性は言う、ユラニーは独り愛らしく、うるわしと。そして余が感性さえもなし得ぬほどに余をかの方に結びつけん。(9-14)」

Il faut finir mes jours en l'amour d'Uranie,
L'absence ni le temps n'en sauraient guérir,
Et je ne vois plus rien qui me pût secourir,
Ni qui sût rappeler ma liberté bannie.

4) Lafay, I, p.LXXXI et *sqq.*

5) Génétiot, p.86.

6) 作品番号および行番号は Lafay 版による。これより先, op.18. とあれば, Lafay 版に従って作品18. 訳は田島の拙訳による。続いてフランス語原文を引用する。

Dès longtemps je connais sa rigueur infinie,
 Mais pensant aux beautés pour qui je dois périr,
 Je bénis mon martyre, et content de mourir,
 Je n'ose murmure (*sic*) contre sa tyrannie.

Quelques fois ma raison, par de faibles discours,
 M'incite à la révolte, et me promet secours,
 Mais lorsqu' à mon besoin je me veux servir d'elle;

Après beaucoup de peine, et d'efforts impuissants,
 Elle dit qu'Uranie est seule aimable et belle,
 Et m'y rengage plus que ne font tous mes sens.

美しい女性がなびかないから残酷だと嘆く誇張法は、好きでもない男に言い寄られた女にしてみれば、身勝手に大袈裟な言い方だ。しかし、触れることのできないものほどあこがれの対象になりうるのだから、この誇張法は、逆説でも何でもなく、自然の心理なのかもしれない。このようにヴォワチュールの多くの詩において、女性は、美しく気高いが愛を受け入れず、想いを寄せる男性を囚われ人にする暴君として表現される。また男は愛の殉教者として描かれる。

なれなれしさと滑稽さ

確かにヴォワチュールにはこういった愛の酷薄さを歌う歌が多い。だが、実際われわれにとって、そして多分同時代の読者、サロンの面々にとっても、ヴォワチュールの魅力は、まじめな、愛の残酷さへの嘆き節を歌う詩人としてのそれではなく、サロンを活気づける軽さ、遊びである。

ヴォワチュールは女性の残酷さ、美しさを述べ立てるだけでなく、女性へのなれなれしさを、揶揄も作品の中に込める。Génetiot は女性観の転回にヴォワチュールが重要な役割を演じていると考える。

たとえば「ランブイエ嬢に即興で」と題されたロンド (op.64.) では、ランブイエ邸のサロンの副主人で、高貴な想い人たちに崇拜されながらモントジエ公爵の求愛を拒んでいたジュリー・ダンジェンヌに、その美しさと酷薄さを軽い口調で非難する。

「人々が私にそう申します，お嬢さん。あなたは私どものあらゆる心をつまみ食いしていらっしゃる。あなたのお美しい鼻のために私どもに税金を課すことをお考えなのではないでしょうか。(1-4)

あなたはとても善良でいらしてとてもお美しいそしてあなたは処女でいらつしゃると存じます，人々が私にそう申します。(5-7)

でももう少し反抗的でないようになさねば，そしてあなたが不意を襲われた想い人たちに喧嘩をお売りにならないようになさねば，あなたは彼らを拘束したままでいらつしゃり，そしてあなたは彼らに対して残酷すぎる，人々が私にそう申します。(8-13)」

On le m'a dit, Mademoiselle,
Que tous nos cœurs vous retenez,
Pensez-vous pour votre beau nez,
Mettre sur nous une gabelle?

Vous êtes fort bonne et fort belle,
Et crois que vous êtes pucelle,
On le m'a dit.

Mais il faut être moins rebelle,
Et ne point faire de querelle
Aux Amants que vous surprenez;
Vous en tenez d'emprisonnés,
Et vous leurs êtes trop cruelle,
On le m'a dit.

Génetiot によれば，ヴォワチュールが恋愛詩に新局面を加えた。すなわち，遊び，おどけ，きわどさである。以下 Génetiot の論を引くと。

「ヴォワチュールだけが彼の恋愛詩のそこここにきわどいほのめかしを敢えて挿入した。これが彼の作品に，ランブイエ邸の雰囲気独特の特別な色合いを加えることになった。」⁷⁾

「ヴォワチュールだけがうまくこのきわどい話題を取り扱うことができたの

7) Génetiot, p.103-104.

ではあるが、同様にこの人物だけが、即座に成功を収めたもう一つ別のトーン、すなわちクレマン・マロー的なおどけの源泉であった。」⁸⁾

「ヴォワチュール、さらにサラザンは、自ら作り出したばかりの新しい美意識の遊び的な部分に固執していた。(中略)この段階から愛はより人間的でよりほほえましく、より軽くなり、牢獄であることを辞めるのである。」⁹⁾

恋愛詩の中で、心の交流を許さない女性を不可触の崇拜の対象として取り扱うことから、対話が可能な等身大の人間として表現することへの移行が、ヴォワチュールや Sarasin によってなされたとするのである。

Antoine Adam はビュルレスクの流れの一部はヴォワチュールに始まる、とする。

「もしビュルレスクが当初、クレマン・マロー風のおどけの模倣であったとするならば、ランブイエ邸におけるマローの流行とヴォワチュールによるマロー風の詩作品が当然、その最も直接の源の一つと考えられるだろう。」¹⁰⁾

Génetiot はこの女性像の変質を1640年代としている。「いわゆる詩、テーマおよびイメージに関しては、1640年代に二つの革新に出くわすことになる。一つは恋愛詩が、より人間的でより優雅な愛の新しい文学的表明を洗練させることによって、ペトラルカに似せようという慣例や月並みから離脱したこと、もう一つは、新しいビュルレスクというジャンルによってパロディ化されからかわれたのはあらゆるまじめな詩全体であったということである。」¹¹⁾

詩の中における女性像は、ヴォワチュールによって、あがめ奉る存在から等身大に引き戻された。不可触の存在であるゆえに歌われてきた女性像を、ヴォワチュールは触れられる存在として描くことによって、等身大に引き戻した。

文字どおり「触れる」ことをテーマにした作品を挙げる。

「ロンド」(op.58.)

「あるいはあなたがとても巧妙に騙すことができになるのか、あるいは私

8) *ibid.*, p.104.

9) *ibid.*, p.106.

10) Antoine Adam, « Note sur le burlesque », dans *XVII^e siècle*, no.4., 1949, p.81. (cité par Génetiot p.114. Note 79.)

11) Génetiot, p.132.

を十分に忠実に愛していらっしゃるのか、そのいずれなのか私には申せません。でも私は泣き、溜息をつきますが、どんな慰めも得られません。(1-5)

あなたのために私はあっさりと捨てたのです、私が確かに得ていたものを。だって私を愛するものがいて、あなたのご存じのところで私はいくばくかの影響力を持っていたのですから。(6-9)

恋人の苦しみに与えることのできる全き満足を期待してはおりません、誰が私を殉教から救い出せましようか、私の心はそんな大きな幸福を切望しは致しません。でもあなたに触れさせてください、あなたのご存じのところだけでも。(10-15)」

Ou vous savez tromper bien finement,
 Ou vous m'aimez assez fidèlement,
 Lequel des deux, je ne le saurais dire,
 Mais cependant je pleure et je soupire,
 Et ne reçois aucun soulagement.

Pour votre amour j'ai quitté franchement
 Ce que j'avais acquis bien sûrement;
 Car on m'aimait, et j'avais quelque empire
 Où vous savez.

Je n'attends pas tout le contentement
 Qu'on peut donner aux peines d'un Amant,
 Et qui pourrait me tirer de martyre,
 A si grand bien mon courage n'aspire;
 Mais laissez-moi vous toucher seulement
 Où vous savez.

ロンドでは冒頭の数語 (Closure) が、2連、3連の最終行で繰り返されるのだが、そのその語句は微妙に意味を変容させていく。この作品の Closure は、Ou vous savez なのだが、Ou はアクサングラヴを無視して、接続詞として、また関係代名詞として異なる意味で用いられ、まじめな愛の嘆きとして始まった詩が下品ななれなれしさで終わる。

エロティックな詩

冒頭に述べたように、ヴォワチュールの作品全体としてみてみれば、女性の姿は抽象的な美として描かれ、肉体の描写は慣用的な表現の域を出ない。しかし稀に語られる大胆な例を見ると、触れることのできない遠慮からはかけ離れた、エロティックななれなれしさ、猥褻さが見えてくる。

「愛の嘆き、愛人の不在を嘆く恋人の呻き」と題する55 Rond (op.55) では、「この絨毯の高貴な緋色、これらの小川の心地良い音、これらの谷間の自然な優雅さ、私の感性を傷つけよ、私を苦しめ、さいなめ、この野の中に私が最も愛するものを見ないがゆえに。」

De ces tapis le pourpre précieux,
De ces ruisseaux le bruit délicieux,
De ces vallons la grâce naturelle,
Blesse mes sens, me gêne et me bourrelle,
Ne voyant pas ce que j'aime le mieux.
Dedans ces près.

と田園風景の後ろに肉体がほの見える。

また「Rond」(op.60.)では、顔からは始まった描写は、胸、胴と進み、しまいには「真紅で甘美なとある小さな通り道」について語る。

「どんなに美しい体でもどんなに美しい姿でも、フィリスが天から与えられた顔のそばにあっては粗雑なもの。彼女の口、彼女の笑い、彼女の目はどんな心も奪ってしまう。(1-5)

彼女の胸は神々しい作品で、彼女の胴ほどすらりとしたものはなく、結局彼女はとても美しいものを持っている。(6-9)

中でも私を最も誘うのは真紅で甘美なとある小さな通り道、でもこの秘密は神様へだけ、我がペンよことば遣いを変えよもっと美しく。(10-15)」

Tout beau corps, toute belle image
Sont grossiers auprès du visage
Que Philis a reçu des cieux,
Sa bouche, son ris et ses yeux

Mettent tous les cœurs au pillage.

Sa gorge est un divin ouvrage,
Rien n'est si droit que son corsage,
Enfin elle a, pour dire mieux,
Tout beau.

Parmi tout, ce qui plus m'engage,
C'est un certain petit passage,
Qui vermeil et délicieux,
Mais ce secret est pour les Dieux;
Ma plume, changez de langage,
Tout beau.

ロンド「薬をのんだとある人物について」(op.61.)では、この作品の執筆当時はまだ子どもであるとはいえ、高貴な身分のブルボン嬢のトイレ通いをからかう。

「この夜寝ながら私は、5, 6度, そのお側ではどんなものも私に気に入りが無いという異様なお姿のあなたにお目にかかりました。あなたのスカートはとても明るいオパール色であなたのガウンはダイヤモンドのようでした。

(1-5)

天の下ではどんなものもこんなに美しくはありません、太陽もこれほど明るくは輝きません。そしてあなたはその光を5, 6倍は越えていらっしゃいました。

(6-9)

眠りも私たちを空しく騙そうとしたこと。偶然その同じ時にあなたは全く逆の状態(醒めて)でいらした。でもところで例の件はいかがでいらしたのでしょうか。5, 6度, そうっと(トイレに?)おいでになったのでしょうか。(10-15)」

Cinq ou six fois cette nuit en dormant,
Je vous ai vue en un accoutrement,
Auprès duquel rien ne me saurait plaire,
La jupe était d'une opale très claire,

Et votre robe était un diamant.

Rien n'est si beau dessous le firmament,
L'Astre du jour brille moins clairement,
Et vous passiez sa lumière ordinaire
Cinq ou six fois.

Que le sommeil nous trompe vainement!
Par aventure en ce même moment
Vous vous trouviez en état bien contraire:
Mais à propos, comment va cette affaire?
Avez-vous bien été tout doucement
Cinq ou six fois?

女性があがめられ高められるどころか、揶揄の対象とさえなってしまう。ブルボン嬢は女性というには幼く、また肉体そのものを語っているのではない。しかしかにかに幼く親しいとはいえ、王族を下の話のネタにするとは。しかもスカトロジーは肉体そのものの描写以上に存在から精神性を剥奪し、肉体性を感じさせ、滑稽さを強調する。

ヴォワチュールがロンドを1630年代に流行させたことは、既に見た¹²⁾。ヴォワチュールはより自由な形式として、スタンス (Stances) という形式も好んだ。Lafay 版や Ubicini 版にはスタンスとして14編が採録されている。スタンスはイタリア語の Stanza (連) からの借用語で、制約としては、同じ形式の連を重ねることだけであった。従って長さは詩想に応じてまちまちとなる。ヴォワチュールはこの形式を滑稽な味を持つ作品のための形式として用いている。以下に3編を挙げる。

「シャツの袖がまくれあがって汚いお嬢さんへ」(op.13)

「100人もの想い人を永続的に袖の下に抱えていらっしゃるあなたなのでから、少なくともきれいにしておいてくださり、袖をもっと白くしててください。(1-4)

12) 田島 (1993)

あなたは勝利の権利を行使して、正当な理由によってあなたの想い人達を牢につなぐことができになりますが、その獄舎がこれほど黒いものではありませんように。(5-8)

あなたに対してこんなに信心深く、あなたが灰にしておしまいになった私の心、あなたはそれを独房にお入れになった、まもなく吊るそうという囚人のように。(9-12)

夜、昼と身を焦がして、私はこの場所を煙でいっぱいにしたのでしょうか、そして私の愛の炎が袖を煙突にしてしまったのでしょうか。(13-16)」

Vous qui tenez incessamment,
Cent Amants dedans votre manche,
Tenez-les au moins proprement,
Et faites qu'elle soit plus blanche.

Vous pouvez avec raison,
Usant des droits de la victoire,
Mettre vos galants en prison;
Mais qu'elle ne soit pas si noire.

Mon cœur qui vous est si dévot,
Et que vous réduisez en cendre,
Vous le tenez dans un cachot,
Comme un prisonnier qu'on va pendre.

Est-ce que brûant nuit et jour,
Je remplis ce lieu de fumée,
Et que le feu de mon amour,
En a fait une cheminée?

地口 (calembour) を解説するのは気が引けるのではあるが、敢えて解釈を加える。直訳すれば、「袖の下に抱える」という意味になる avoir une personne dans sa manche (ある人物を思いのままにする) という慣用表現で女性の優位を語りながら、地口によって慣用表現を転化させ、コミックに変容させる。垢に汚れて黒い袖と、(不正な)愛にとらえられ、身を焦がして煙突を黒く汚して

しまった私，という二つのパラダイグムが平行して語られる。両義性によることば遊びの詩である。

「田舎で馬車がひっくり返ってスカートが捲れ上がったご婦人へのスタンス」(op.14.)。Magneによると，ランブイエ邸の遠出の馬車が転倒して投げ出されたマロル嬢のスカートがめくりあがるという事件があった。この人物を快く思っていないランブイエ夫人がヴォワチュールにこの詩を書くように勧めたという。¹³⁾

「フィリスよ私はあなたの支配下に居ります，でも今回は手の施し様がないまま私の魂はあなたの囚われ人なのです。でも正義もいわれもなくあなたは私を後ろから襲われた，これは裏切りではないですか。(1-6)

私はあなたの目には警戒しておりました。そして私達の顔を蒼白にするあなたの優美な顔にも。私に対しては色気をお持ちになれずに，あなたは別の方をお見せになったのです，私が警戒していなかった方のものを。(7-12)

まずはそれは私の征服者となり，その魅力は私の心を貫きました，私の自由は奪われてしまったのです。でもこのまま意地悪なそれは，この暗殺をなすために一生隠れてしまったのです。(13-18)

私が不意を襲われたのは確かです。炎が私の心を通りました。そしてかつては誇り高かった私の心は慎み深く愛に身を屈したのです，あなたのお尻が草の上で，日の光を恥じ入らせたのを見た時。(19-24)

天上で困惑した太陽は，それが光り輝くを見て，自分の光がなんの役にも立たぬと，後戻りしようかとしました。ところがあなたの後ろを見たので自分のそれを敢てさらすことはできません。(25-30)

多くの美を見いだして，シルヴァン（森の妖精）達は魅惑され，ゼフィロス（西風，春の神）はあなたがお持ちの別の魅惑的なものを見て，フロール（花の神）がいても，あなたのご存じのところに接吻したのです。(31-36)

花々の女王である薔薇はそのまま生き生きとした色を失い，怖れにカー

13) Ubcini は1644年と想定されるマロル嬢 (Magdelaine-Claire de Lenoncourt Marolles) 宛の書簡と関連させる。(Ubcini, I, p.422.)

Magne はさらに注で細かく検証し，この他に，Chemerault 嬢であろうという説と，Maynard の証言によると，Aubry 嬢であるという二説を上げながらも，やはり書簡166の Marolles 嬢が間違いなからうとする。ただ，この出来事は Ubcini のするように1644年ではなく1630年であろう，とする。(Magne, p.39. et Notes)

Lafay は Magne の説を再掲する。(Lafay, I, p.52-53.)

ネーションはあおぎめ、敗れてしまった水仙（ナルシス）はあなたのお尻に姿を映すために自分自身への愛を忘れてしまった。(37-42)

従ってなにものもこんなに貴重ではありません、あなたの美しい目の澄明さも、変わることはないあなたの肌も、それ以外のあなたの魅惑的なものも、称賛には値しないでしょう、それらが姿を見せぬ時にしか。(43-48)

それには私に千もの苦痛を引き起こすような欠点があると誰か申します。というのはそれは恐ろしく人見知りで、ダイヤモンドのように堅く、目もなければ、耳もなく、まれにしか話さないと言うのですから。(49-54)

でも私はそれが大好きです。そして私の詩が、この世の隅々までその記憶を生き永らえさせることを望んでいます。そして今後、かつて存在したもっとも美しいお尻の栄光をしかるべく歌うことしか考えないようにと望んでいます。(55-60)

フィリスよ、あなたの魅惑的なものをお隠しなさい、もしこれらの美が覆いのないままであれば、死すべきものは永らえることができません。星々の上の高みに座ってわれわれの上に君臨する神々も、あなたほど美しい座はもってはおりません。(61-66)」

Philis, je suis dessous vos lois,
Et sans remède à cette fois,
Mon âme est votre prisonnière:
Mais sans justice et sans raison,
Vous m'avez pris par la derrière,
N'est-ce pas une trahison?

Je m'étais gardé de vos yeux;
Et ce visage gracieux,
Qui peut faire pâlir le nôtre;
Contre moi n'ayant point d'appas,
Vous m'en avez fait voir un autre,
De quoi je ne me gardais pas.

D'abord il se fit mon vainqueur,
Ses attraits percèrent mon cœur,
Ma liberté se vis ravie;

Et le méchant en cet état,
S'était caché toute sa vie,
Pour faire cet assassinat.

Il est vrai que je fus surpris,
Le feu passa dans mes esprits:
Et mon cœur autrefois superbe,
Humble se rendit à l'Amour,
Quand il vit votre cul sur l'herbe,
Faire honte aux rayons du jour.

Le Soleil confus dans les Cieux,
En le voyant si radieux,
Pensa retourner en arrière,
Son feu ne servant plus rien;
Mais ayant vu votre derrière,
Il n'osa plus montrer le sien.

En découvrant tant de beautés
Les Sylvains furent enchantés,
Et Zéphyre voyant encore
D'autres appas que vous avez;
Même en la présence de Flore,
Vous baisa ce que vous savez.

La Rose la Reine des fleurs,
Perdit ses plus vives couleurs,
De crainte l'œillet devint blême;
Et Narcisse alors convaincu,
Oublia l'amour de soi-même,
Pour se mirer en votre cul.

Aussi rien n'est si précieux,
Et la clarté de votre beaux yeux,

Votre teint qui jamais ne change,
Et le reste de vos appas,
Ne méritent point de louange,
Qu'alors qu'il ne se montre pas.

On m'a dit qu'il a des défauts
Qui me causeront mille maux,
Car il est farouche à merveilles:
Il est dur comme un diamant,
Il est sans yeux et sans oreilles,
Et ne parle que rarement.

Mais je l'aime, et veux que mes vers,
Par tous les coins de l'Univers,
En fassent vivre la mémoire;
Et ne veux penser désormais
Qu'à chanter dignement la gloire
Du plus beau Cul qui fut jamais.

Philis, cachez bien ses appas,
Les mortels ne dureraient pas,
Si ces beautés étaient sans voiles;
Les Dieux qui règnent dessus nous,
Assis là haut sur les Etoiles,
Ont un moins beau siège que vous.

突発的に衆人の目にはいった、たかがお尻のために（いやお尻のためにこそ）、なんと大袈裟なことばを連ねることだろう。ギリシア神話から引用された名前や花や宝石、太陽といった高貴で大袈裟なことばが連ねられる。しかもテーマは相変わらず愛に囚われた無力な男が、征服者の酷薄さを嘆く、という旧来のもの。しかし語られている対象は肉体の中でエロティックとコミックが重なり合った部分である。このずれが笑いを誘う。

なれなれしきは摂政皇太后アンヌドートリッシュへまで向かう。ヴォワチュ

ールは、「何を考えているのか女王様に尋ねられて、(アンヌ・ドートリッシュに)」(op.16.)という題名のスタンスを書いている。その中では、後にアレクサンドル・デュマが『三銃士』の中で描くことになるアンヌ・ドートリッシュとバッキンガム公爵との不倫をほのめかす。

「私は考えておりました。宿命が多くの不当な厳しさの後に、栄光と輝きと名誉の冠をあなた様に戴かせたことを。こうも考えておりました。あなたは、あの頃もっとお幸せ (heureuse) だったろう、あのようにお見うけできた頃は。愛していらした (amoureuse) 頃は、とは申したくありませんが、そう申せば韻がよく合います。(1-8) (中略)

私は考えておりました。私共詩人と申すものは大袈裟に考えるものですが、あなた様がおかれた栄光の中で、あなた様が何をなさるだろうかと。今この時この場にバッキンガム公爵をお呼びになるなら、彼とヴァンサン師(女王の告解神父)のいずれが不興をこうむるのだろうかと。(17-24) (後略)」

Je pensais que la destinée,
Après tant d'injustes rigueurs,
Vous a justement couronnée
De gloire, d'éclat et d'honneurs,
Mais que vous étiez plus heureuse,
Lorsque vous étiez autrefois,
Je ne veux pas dire amoureuse,
La rime le veut toutefois.

(...)

Je pensais, car nous autres poètes,
Nous pensons extravagamment,
Ce que dans l'Eclat où vous êtes,
Vous feriez si dans ce moment
Vous avisiez en cette place
Venir le Duc de Bouquinken, (Bukingham U.)
Et lequel serait en disgrâce
De lui ou du Père Vincent.

優れた韻とは、思いがけない単語が音の類似だけを理由に並べ合わされ、共鳴しあって新たな世界を作り出すことに魅力があるのだから、heureuse と amoureuse という形容詞同士の組み合わせは安易であり、これらを組み合わせるのは韻がそうさせるので仕方がないと言い訳するのはわざとらしい。内容は特に大胆ということもなく、技巧も凝ったものではないが、アンヌ・ドートリッシュに向けて、バッキンガム公爵との不倫愛をほのめかす。レトリックだけでなく現実にも奉っておいてしかるべき皇太后を相手に、きわどいほのめかしを折り込む詩人は皇太后を同等に扱うふてぶてしさを感ぜさせる。

タルマン・デ・レオによれば、アンヌ・ドートリッシュはこの即興で書かれた大胆な作品に怒ることもなく、いたくお気に召したという。「摂政期の初め、皇太后が馬車で Ruel を散策の途中、夢想するヴォワチュールに出会わされた。皇太后は何を考えているかお尋ねになり、そのことについて詩を作るように命じられた。彼はこの詩を作り皇太后にお見せした。皇太后はお笑いになった。(中略) 1650年にヴォワチュールの甥であるマルタン (Martin Pinchène) が、Guyenne から戻った際、ヴォワチュールの初版よりずっと厚くなった詩歌集の第2版を皇太后にお見せした。皇太后はこの詩をお探しになり、この詩がないことに気付かれ、この詩も掲載されることを望まれたとか。」¹⁴⁾

ことば遊びへ

さて以上、上品に女性を語るのではなく、卑猥さ、なれなれしさ、滑稽さとともに女性を語る作品を見てきた。これらの作品の中では女性への態度は女性礼賛どころではないのだが、使われている語彙は、旧来のきまじめな女性礼賛、暴君としての女性に囚われた無力な男を語るディスクールと同じである。ここからかわれているのは、女性という対象だけではなく、恋愛や女性賛美のディスクールそのものがからかわれているのだ。女性を敬して高めるディスクールの後ろから、なれなれしいことばが見えてくる。「(袖に入れて) 男を意のままにする」お嬢さんの袖が、男が恋に身を焦がしたために真っ黒に汚れてしまったり、ギリシャ神話の語彙で語られたのが、転倒した馬車から突然衆人の眼前にさらされた貴婦人のお尻であったり。からかわれ、価値をおとしめられたのは、袖の汚れを見つけられたお嬢さんであり、お尻を見せる羽目に陥った貴婦人であり、昔の不倫を思い出された摂政皇太后であるのと同時に、高貴な

14) cité par Adam, dans Tallemant, I, p.1123.

語彙であり、レトリックである。

文学とはアレゴリーである、と定義すると、一つのシニフィアンの中に複数のシニフィエがあるのは当然のことである。ヤコブソン風に言えば、一つのサンタグム軸には複数のパラディグムが投影されている¹⁵⁾。これらの詩の滑稽さ、面白味は、詩人が女性達に対して取っているなれなれしさから来るのではなく（他の男が女性になれなれしくするのを見るのは不愉快なものだ）、高貴な旧来のことばまでもがからかわれていることから来ているのである。ヴォワチュールは、恋愛や女性美賛嘆のディスクールそのものをパロディ化している。

さて、詩が遊びであり、美を語るディスクールそのものも、からかいの種になっているのであるから、詩が詩自身を語る、言うなればメタランガージュ的な詩、トートロジー的な言い方だが、詩的機能のために書かれた詩に行き着く。メッセージがメッセージそのものに拘泥することを目的にしている詩である。つまり、詩の目的が「詩という形式」そのものという詩に行き着くだろう。ヴォワチュールは詩という形式で遊び、韻で遊び、語彙で遊ぶ。

形式で遊ぶ

たとえばロンドの製作方法をロンド形式で解説したものがある（op.43.）。

「確かに私によって作られたのですよ、というのはイザボーが私にロンドを作るように望んだのですから。それは私を非常（エクストレーム）な苦しみに投げ込みました。何とまあ、13行で8行はオーで5行はエームで韻を踏むんですって、彼女のためなら船（バトー）だって同じくらいの時間で作れますよ。（1-5）

これで5行だけどもでも屑（モンソー）ばかり。ブロードーをひきあいに出してあと8行書きましょう。それからちょっと戦術（ストラタジェーム）を使って、確かに出来上がり。（6-9）

もしこれから先、私の脳髓（セルポー）から、5行引き出せたらご立派（ポー）な事でしょう。でもこれで11行目（オンジエーム）、それに私が12行目（ドゥージエーム）を作ったと思えば、ほら13行が一行に（ニヴォー）揃って、確かに出来上がり。（10-15）」

Ma foi c'est fait de moi, car Isabeau

15) 「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する。」『一般言語学』（第5刷）、194頁

M'a conjuré de lui faire un Rondeau,
 Cela me met dans une peine extrême:
 Quoi, treize vers, huit en eau, cinq en ème!

Je lui ferais aussi tôt un bateau.
 En voilà cinq pourtant en un monceau,
 Faisons-en huit, en invoquant Brodeau,
 Et puis mettons par quelques stratagème,
 Ma foi c'est fait.

Si je pouvais encore de mon cerveau
 Tirer cinq vers, l'ouvrage serait beau:
 Mais cependant je suis dedans l'onzième,
 Et si je crois que je fais le douzième,
 Et voilà treize ajustés au niveau,
 Ma foi c'est fait.

韻で遊ぶ

ヴォワチュールはクレマン・マローのロンドを復活させたのだが、大押韻派 (Les grands Rhétoriciens) の伝統を継いだクレマン・マロにも rime という語自体で韻を踏ませて詩がある。一部を引用する。

「おふざけで韻を踏んだロンドを作りましょう、韻を考えるたびにしばしば風邪を引くもの、要するにご同輩の詩人殿哀れみを、というのもあなたはよそで十分に韻をお見付けになるし、お気が向けば私より上手に韻を踏まれる、お宝や韻は沢山お持ちと来ている。ところが私と来たら、韻とへぼ歌併せても、一文も稼げぬと来ては腹が立つ。(1-8) (後略)」

En m'esbatant ie fay rondeaulx en rithme,
 Et rithmant, bien souuent ie m'enrime:
 Brief, c'est pitie d'entre vous (nous), rimailleurs,
 Car vous trouvez assez de rithme ailleurs,
 Et quand vous plaist, mieulx que moi rithmassez
 Des bien auez et de la rithme assez;

Mais moi, atout ma rithme et ma rithmaille
 Je ne soutiens, dont je suis marri, maille. (...) ¹⁶⁾

クレマン・マロの衣鉢を継いでロンドを復活させたヴォワチュールとしても、韻を踏むという行為自体を語る、メタランガージュ的な詩は少なくない。たとえば先に見たアンヌ・ドートリッシュに宛てたスタンス16のように、韻をいかに踏ませるかということ自体を話題にする詩がいくつもある。

他に「ランブイエ嬢の名でヴォワチュールによって書かれた」という表題が掲げられているロンド (op.67) でも同趣旨の、韻に関する言及がなされている。

「私は私以外が絶対的に治めている想い人を尊重することなどできないでしょう。というのは皆私が支配を好むことを知っていますので。私にこんなふうを書いておよこしになるべきではありません、そちらでは高地ドイツ語しかご存じないのでしょう。(1-5)

私は人が完全に私の下にあることを望みますし、私が何らかの命令を下した時には、私のところへこう言いに来ることを聞いたり致しません、「できないでしょう」と。(6-9)

同じ挨拶をあなたにお返し致しましょう、そしていつの日か、長くここで夜更かししたいと思う時には、あなたに笑いもせずに申し上げます。私の母が皆下がるのを望んでおります、私を一瞬たりと引き止めようとはお考えになりませぬように、私はできないでしょうから。(10-15)」

Je ne saurais faire cas d'un Amant
 Qu'autre que moi gouverne absolument,
 Car chacun sait que j'aime trop l'empire;

16) MAROT, Clément (Edition Georges Guiffrey), *Œuvres*, tome 3. Genève, Slatkine (Réimpression de l'édition de Paris, 1911. p.22. 1969 (1911))

ただし3行目については、MAROT, Clément, *Œuvres complètes de Clément Marot*, (Notice par Abel Grenier) revues sur les meilleures éditions avec une notice et un glossaire par Abel Grenier, tome 1, Paris, Garnier, 1931, p.119.によれば nous である。マロは1518に書かれたこの詩で、自ら詩を書いた時の国王フランソワ一世の注意を引き、フランソワ一世の妹である Magueritte d'Alençon, 後の Margueritte de Navarre の valet de chambre の役職を得た。

Ce n'est ainsi qu'il me fallait écrire,
 Vous n'y savez que le haut Allemand.
 Je veux qu'on soit à moi parfaitement,

Et quand je fais quelque commandement,
 Je n'entends pas que l'on me vienne dire
 Je ne saurais.

Je vous rendrai le même compliment,
 Et quelque jour quand voudrez longuement
 Veiller ici, je vous dirai sans rire,
 Ma mère entend que chacun se retire,
 Ne pensez pas m'arrêter un moment,
 Je ne saurais.

タルマンの注によれば、「Je ne sauraisで始まる Rond への返答であり、下の余白に次のような4行詩があった、「[想い人]のことばを文字どおりお取りになるなランブイエ嬢よ、単に「伊達男」の意味ですが、韻がそうさせるのです。」

Là haut, ne prenez pas amant
 Justement au pied de la lettre;
 Il n'y veut dire que galant:
 C'est la rime qui l'a fait mettre.¹⁷⁾

amant と galant の韻も、先の amoureuse と heureuse と同じ程度に安易である。詩の内容、形式よりも、モントジエ侯爵の求婚を断り続けるランブイエ嬢に向かって、モントジエ侯爵を「想い人」と呼びかけるのは、韻の必要上だとかこつける注にこそ、この作品の魅力はある。身分違いなので最初から勝ち目はないにしても、ランブイエ嬢をめぐるモントジエ侯爵とは反りがあわなかったヴォワチュールが、ランブイエ嬢の名でライバルに宛てて書いた詩なので、ジュリー・ダンジェンヌへの愛と、シャルル・ド・モントジエへの反発が

17) cité par Lafay, II, p.150.

ほの見える。

Neufgermainについて

脚韻を遊びに使った詩人に Louis de Neufgermain (1574- 1662) という凡庸な詩人がいて、その名に由来する Neufgermain と名付けられた形式による詩がヴォワチュールにもある。この形式は、人の名前を音節に分解し、一音節ずつ脚韻として折り込むというものである。折句 (acrostiche) に似るが、折句が各行の冒頭 (または末尾) の文字を縦に使ってある単語を折り込むのに対し、Neufgermain は音節単位で人名を折り込む。タルマンが伝えるところによると、ランブイエ侯爵が Neufgermain に人の名を脚韻の中に折り込んで見てはどうかと勧め、この詩人は同種の詩を多く書いたという。¹⁸⁾

ヴォワチュールの neufgermain は、8音綴4行の14連による64行からなるが、ヴォワチュールの学生時代からの友人で精力的な外交官であったダヴォー伯 (Claude de Mesmes, baron puis comte d'Avaux, (1595-1650)) の名を脚韻に折り込む。2音節の名前なので、奇数行は da, 偶数行は vaux または vos など、一行おきに韻を踏む。内容はダヴォーの外交活動をたたえるもので、形式には遊びがあるが、内容は滑稽ではない。第一連のみ示す。

「先日ジュピターが、マーキュリーと彼の司法官を通じてあらゆる神たちに知らせ、命じた、偉大なるダヴォーに礼を尽くせと。(1-4) (後略)」

L'autre jour Jupiter manda,
Par Mercure et par ses Prévôts,
Tous les Dieux, et leur commanda,
Qu'on fit honneur au grand d'Avaux.

Lettrisme まがい

音節だけではなく文字を使って遊ぶ lettrisme まがいの作品もある。先に引いた作品は neufgermain という詩形であったが、「神々の集会における文字の訴えに対するジュピターの演説」(op.82.) では、この詩人 Neufgermain の名前の中に含まれない子音たちが反乱を起こしたという設定で、子音を擬人化す

18) Tallemant, I, p.541.

る。

「神々の集会における文字の訴えに対するジュピターの演説」

「不滅の軍団であり、高貴かつ忠実な種族であり、余の手に王笏を持たせた諸君は、われわれがヌッフジェルマン (Neufgermain) のためにかの美しい名前を考案した時どれほど長く話し合ったか良くご存じだ。(1-6)

そのリズムが穏やかに感覚を打つこの偉大な名前の中に、神のような慎重さで、われわれはすべての母音を入れたのだ。ところが今日聞くところによると子音が反乱を起こしているという。(7-12)

BとCとSがLと共に武装し、PとTが彼らの争いに加わり、評判を高からしめんがためにこの素晴らしい名前の中に現われることを望んでおる。そしてQに至るまで、そこにいたいと望まぬものはないとか。(13-18)

それなしには地上でも海上でもなにもものも善く (bon) も美しくも (beau) もないであろう、世界のあらゆる富 (biens) をなすB、そして天 (Ciel) がそれによって作られるところのC、彼らはもしわれわれが彼らを追い払いでもしようものなら、墓に身を隠すであろう。(19-24)

ヴィーナスがそれによって美しく (belle) なるところのL、それによってわれわれの真髓が不滅 (Immotelle) になるところのLは、この学識ある人物の名の中で華やかに輝きたいと望んでおり、ヴェルギリウス (Virgile) のそれの中にあることだけでは満足しようとはしない。(25-30)

この瞬間でさえ、余はSが下の方で悪さをして比べようのない恨みの中で怒りにまかせて太陽 (soleil) やわれわれの天球の軸 (essieux de notre sphère) を粉々にしようと脅しにかかっておる。(31-36)

しかし悪代官 (Satrape) として歩き回り、法皇 (Pape) の半分でもあるPは、慈悲 (pitié) から身を引きたいと考え、今後、貧困 (pauvreté) や、怠惰 (paresse) や、麻痺 (paralysie) にしか留まるまいという気まぐれに身を委ねておる。(37-42)

地上では君主たち (Princes) を作るかの文字と、余の雷鳴 (tonnère) を作るTが声高に余を離れんと語っており、たとえ宿命が何を命じようと、この二つの文字が余を捨てるならば、余はジュピター (Jupiter) ではありえない。(43-48)

しかしこれらは諸君みんなに関わることでもある。Bはバッカス (Bacchus) には必要であるし、C無しにはケレース (Cérès, ローマの豊穰の女神) は地に落ちようし、もしLとSとPが反乱を起こせば、哀れなパラス (Pallas) は何としよう、彼の者のためにはもはやAaしか残らぬだろうから。(49-54)

従って彼らを満足させねばなるまい、そして彼らの期待に対しては、この稀なる男がブデルヌッフジェルミコプサン (Bdelneufgermicopsant) といった名前でも持つのでないかぎり、十分に有効な処方はないであろう、しかしこれはちと奇妙な名ではある。(55-60)

しかし、こういうふうにしてすべてを一緒にして、永遠の愛を加えて、最初にそれらをこの世に送り出したパラメーデース (Palamède, ギリシア字母の θ (Thēta), ξ (Xi), χ (Khi), ϕ (Phi) の発明者と擬されている。) のもとに、Q を X や Y や Z と共に送り返すのが、最も良いように余には思われるのだ。(61-66)」

DISCOURS DE JUPPITER en l'assemblée des Dieux sur la plainte des lettres.

(Réponse, sous le nom de Jupiter, à la plainte des consonnes qui n'ont pas l'honneur d'entrer au nom de Neufgermain.)

Vous savez bien, troupe immortelle
Race généreuse et fidèle,
Qui m'avez mis le sceptre en main,
Combien de jours nous consultâmes,
Quand nous fîmes pour Neufgermain,
Le beau nom que nous inventâmes.

Par une divine prudence,
Dans ce grand mot dont la cadence,
Frappe si doucement les sens,
Nous mêmes toutes les voyelles:
Mais aujourd'hui comme j'entends,
Les consonnes font les rebelles.

B, C, S, armez avec L,
Et P, T, joints à leur querelle,
Espérant se mettre en crédit,
Dans ce beau nom veulent paraître,
Et n'est pas même à ce qu'on dit,

Jusques au Q, qui n'y veuille être.

B, qui fait tous les biens du monde,
Sans qui sur la terre et sur l'onde,
Rien ne serait ni bon ni beau,
Et C, qui le Ciel sut produire,
Se vont cacher dans le tombeau,
Si nous pensons les éconduire.

L, par qui Vénus est belle,
Qui rend notre essence immortelle,
Glorieuse veut éclater,
Dans le nom de cet homme habile:
Et ne se veut pas contenter,
D'être dans celui de Virgile.

Même en ce moment j'entends S,
Qui fait là bas de la diablesse,
Et dans un dépit non-pareil,
Menace pleine de colère,
De mettre en pièces le Soleil,
Et les essieux de notre sphère.

Mais le P, qui marche en Satrappe, (*sic*)
Et qui fait la moitié d'un Pappe, (*sic*)
Se veut tirer de piété,
Et s'est mis dans la fantaisie,
De n'être plus qu'en pauvreté,
En paresse, et paralysie.

Lui qui fait les Princes en terre,
Et T, qui forme mon Tonnerre,
Parlent tout haut de me quitter,
Et quoi que les destins ordonnent,

Je ne puis être Jupiter,
Si ces deux lettres m'abandonnent.

Mais vous en avez tous affaire,
B, pour Bacchus est nécessaire,
Et sans C, Cérès est à bas,
Si L, S, et P, se rebelle,
Que fera la pauvre Pallas,
Qui n'aura plus qu'Aa pour elle?

Il faut donc les rendre contantes
Et je ne vois à leurs attentes
Aucun remède assez puissant,
Si ce n'est que cet homme rare,
Ait nom Bdelneufgermicopsant,
Mais ce mot est un peu bizarre.

Pourtant pour le mieux il me semble,
Qu'ainsi nous les mettions ensemble,
Jointes d'un éternel amour,
Et renvoyons à Palamède,
Qui le premier les mit au jour,
Le Q, avec X, Y, Z,.

この詩は、文字を擬人化してギリシア神話の神々との戦いと見立てたものであって、いわゆる *lettrisme* や *rébus* (判じ絵) とは違う。*lettrisme* ではアルファベットを連ねて、裏側に別の意味を込める。

ことばへの関心

詩人であれば、ことばへの関心があることは当然のこと。詩人がなぜことばに興味を持つのか、などと問う必要はないだろう。だが、ヴォワチュールが生きたサロン、17世紀前半は、会話、ことばの洗練が重要な関心事であった場所であり時代でもあった。コンラール (Valentin Conrart) のサロンで開かれて

いた集まりを、リシュリユーがアカデミーフランセーズの名で、ことばの洗練のための国家政策の場として公的役割を与えたのは1635年であった。リシュリユーはまた、ヴォージュラ (Claude Favre de Vaugelas) に辞書の編纂を委ねた。アカデミーの辞書は1694年まで日の目を見ないが、ヴォージュラは、資料をサロン、宮廷に採った *Remarques sur la Langue Française utiles à ceux qui veulent bien parler et bien écrire* (1647) を公刊して1640年代の bon usage を提供した。

ヴォワチュール自身はアカデミーフランセーズの創立メンバーにあげられてはいたが、会合には全く出席せず、この新しい組織に対しては冷淡ではあった。だが、bon usage については一家言を持っていた。ことばの洗練への関心を示す書簡を挙げる。この書簡は、1637年の秋、ガストン・ドルレアンとトゥールに滞在中のヴォワチュールに、アカデミーを中心に接続詞 car に関する論争が始まっていると伝え、ヴォワチュールに意見を述べるように求めたパリのランブイエ嬢に答えたもの。¹⁹⁾

ランブイエ嬢宛て [1637年]

拝啓

「だって (car)」は私たちの国語の中で大いに尊重されていますので、私はこの言葉に対してなされようとしている過ちに対しあなたがお持ちのあわれみを非常に評価します。お話のアカデミーについては、こんな乱暴によって創立されようというのを見れば大して期待できません。ヨーロッパのいたる所で運命が悲劇を演じている時に、これ程王国に仕え、王国のどんな騒乱の際にも良きフランス人 (フランス語) の姿を示してきたこの言葉が狩りたてられ、訴えられようとしているのを見る時程、憐愍に値するものは見られません。私にとっては、常に理性 (理由) の先頭に立って歩き、それを紹介する以外の役割を持たなかった言い回しに対して彼らがどんな理由を引き合いに出せるのかわかりません。彼らがどんな利益のために、「だって」に属するものを、「なにゆえなれば (pour ce que)」に与えるために取り上げるのか、なぜ彼らが3字で言えることを3語で言いたがるのか、私にはわかりません。もっとも恐るべきことは、このような不正の後にはさらなる不正が企てられるだろうということです。「しかし (mais)」に攻撃をかけてくるのに造作はないでしょう。「もし (si)」だって安全なままでいれるかどうかわかりません。したがって他の言葉を結びつ

19) Magne, p.84.

けるあらゆる言葉をわれわれから取り上げてしまったのち、才子の方々は私たちを天使の言葉に縮小してしまうおつもりなのです。そうはできなくとも、少なくとも彼らは私たちが記号だけで話すように余儀なくさせようとするでしょう。確かにあなたのおっしゃった、どんな例でも人間のものの不確かさをこれ以上よく知ることはできない、ということは本当だと認めます。数年前に、私は「だって」より長生きしたに違いないと言った人は、私に（旧約聖書の）族長たちより長い人生を約束してくれたのだと思ったことでしょう。でも11世紀の間、力に充ち信頼を寄せられ生きた後、もっとも重要な契約に使用され、われわれの王たちの忠告に立派に立ち合った後、それは突然寵愛を失い激しい終わりに脅かされているのです。もはや空に「偉大なる car は死せり」と叫ぶ哀れな声を聞くのを待つだけです。そして偉大なる「Cam」の死であろうと偉大なる「Pan」（原注、スエトニウスによれば、ティベリウス帝の時、森で「偉大なるパンは死せり」という叫びが聞こえたという。）の死であろうとこんなに重要で奇妙には思えませんでした。この点に関してわれわれの世紀の最良の才気の一人であり、私が非常に敬愛する人物に相談すれば、彼はこんな新奇なことは断罪しなければならない、われわれの父祖の「だって」をその土地や太陽と同じように使わなければならない、シャルルマーニュや聖ルイの口にも昇った言葉を追い立てるべきではないと言うことでしょう。でもそれを保護すべきなのは主にあなたです。なぜなら私たちの国語のもっとも大きな力ともっとも完璧な美しさは、あなたの言葉の中にあるのですし、そこであなたは至上の力をお持ちで、思うがままに言葉を生かしあるいは死なせたりなさるに違いないのですから。したがってあなたはこの語をそれが陥ろうとしていた危機からすでにお救いになった、またあなたのお手紙のなかに封じこめながら、時間も羨みも手を出せないアジールに、栄光の場に置かれたようなものだと思います。告白いたしますと、これらの中で、あなたの優しさがどれほど奇妙なものか見て驚きました、また百人の男とを容赦なく死ぬままになさるであろうあなたが、1シラブルが死んでいくの見ておいでになれないと変だと思います。もしあなたが私に対して「だって」に対してと同じような心遣いをお持ちでしたら、私は私の不幸にもかかわらずとても幸せだったでしょう。貧困も、追放も苦痛もほとんど私に響きえなかったでしょう。たとえあなたが私からこれらの不幸をお取り除きになれなかったにしても、その感覚はお取り除きになったことでしょう。私があなのお手紙から何らかの慰めをいただくことを期待しておりました時に、その手紙は私のためというよりも「だって」のためなのだということ、その追放は私のそれよりもあなたを苦痛に陥れるのだということに気づ

きました。確かにそれを保護なさるのは正しいことです。でもあなたはその語に対してと同じくらい私を気遣ってくださるべきでした、あなたは一語のために友人を見捨ててしまったと非難されないために。あなたは私が書いたことについては何もお答えにならず、私に関することについては何もおっしゃいません。3, 4枚の間に辛うじて1度だけ私のことを思い出され、その理由は「だって」なのです。今度はもっと私を御考慮くださいますように。また苦しんでいるものの保護を試みられる時には、私もその中の一人だと思い出してくださいますように。あなたがこの御寵愛を私に同意してくださるようにこの語自体をいつも使うようにしましょう。またあなたは御寵愛をくださるべきなのです、「だって」私はあなたの、云々。(Ubicini, I. p.293.)

car への弾圧を嘆き、その危機に同情するというモチーフは、先の子音の反乱という詩のモチーフに類似している。car という単語を擬人化する技巧や、ギリシア神話、歴史への言及、そして1単語への同情は持つのに男が(恋いこがれて)死んでしまうのには同情を示さない冷淡な女性への非難のそぶり、などは、技巧を凝らした韻文の中の世界と通じるものがある。

一語一語に関して洗練を目指して論争が起こるほどサロンにおけることばへの関心は過度に走る。この過剰な熱気は天才モリエールによって *Les Précieuses Ridicules* の中でからかわれることになる。そしてわれわれはそのモリエールの眼鏡を通してサロンの言語遊技を眺めている。ヴォワチュールの韻文の言語は、モリエールにからかわれるサロンの言語遊技の流れの中にある。ただ、この書簡に示されたヴォワチュールの意見自体は至極もっともなもので、穏健であり、モリエールの合理性に通じるものである。

おわりに

以上、ヴォワチュールの詩において、女性への接し方が滑稽に、かつなれなれしく変容していくことは、女性像が変容したというだけではなく、同時に女性を語るディスクールそのものがからかわれ、パロディ化されているのではないかと考えた。パロディ化は、多くはヴォワチュール自身の資質によるものであろうが、当時のサロンにおけることば、語彙への関心が、ことばの洗練を過度に要求し、メッセージを伝える道具としてのことばの有用性よりも、ことばそのものに淫してしまう状態に陥ってしまっていたことに関連づけられるのではないかと考える。実際われわれはこれよりすぐ後にモリエールがサロンのプレッシュ

一たちの語彙をからかっていることを知っている。ヴォワチュールはモリエールにからかわれたサロンの文人なのだが、その諧謔の健康さという点においてはむしろモリエールの側に立つと言えるかも知れない。

(1997年9月9日)

書誌 (直接引用したもののみ)

VOITURE, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, 2 vols., Paris, Librairie Marcel Didier, 1971. (Lafay と表記)

VOITURE, Vincent, *Œuvres de Voiture*, 2 vols. Lettres et poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini, Genève, Slatkine, 1967. (Paris, 1855). (Ubicini と表記)

田島俊郎 「ヴォワチュールの Rond 注解」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第4巻, 1993年

田島俊郎 「ヴォワチュールの神話世界と女性美」『言語文化研究, 徳島大学総合科学部』第2巻, 1995年

ロマン・ヤーコブソン 『一般言語学』(第5刷), みすず書房, 1981, 194頁 (JAKOBSON, Roman, *Essais de linguistique générale*, Paris, Minuit, 1963, Collection “double”, p.220.)

GÉNETIOT, Alain, *Les Genres lyriques mondains (1630-1660) Etude des poésies de Voiture, Vion d'Alibray, Sarasin et Scarron*, Genève, Groz, 1990.

MAGNE, Emile, *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (Nouvelle édition).

TALLEMANT DES REAUX, *Historiettes*, tome 1. Paris, Gallimard, 1990, (Pléiade)